「研究と実務を架橋するフィールドスクール」報告書

―ネパール・フィールドスクールに参加して―

平成 18 年入学
参加したフィールドスクール：ネパール
調査地：カンボジア
宮崎由伊

キーワード：開発，NGO，持続性，教育，伝統

自分の研究テーマについて

研究の目的は，貧困層を含めたすべての住民が受益し得る農村開発のあり方を模索することである。博士予備論文では，カンボジアの一農村を事例に，NGO の開発プロジェクトと地域住民の対応を検証した。

調査地は島の中にあり，出稼ぎ労働など外部社会との接触機会が少ない。そうした状況の中，Oxfam-Australia（海外），CRDT（ローカル）という２つの NGO が，「参加型」開発を実践してきた。前者は組織形成支援（米銀行など），後者は世帯別援助（養魚池の設置など）が特徴である。

村の全 142 世帯を，水田の有無，及び米の収穫量と消費量から導かれる「米収支」により 3 つの階層に分類し，各プロジェクト参加率や，意識の違いに着目した。その結果，貧困層にとって，組織形成支援の方が，世帯別援助よりも受益しやすいことが明らかになった。但し，組織による利益のみで彼らの生活が保障されるわけではない。

一方，食糧自給能力の向上に有効とみられる世帯別援助の受益者は，開発組織の役職者であるケースが多い。CRDT は，貧困層優先ではなく、「頑張る人が報われる」方針を村にもたらした。それ故か、援助受益数の多寡は「意欲」や「努力」の差と捉えられる傾向にあり，貧困層救済意識は働きにくい

ようであった。村人の自助努力も大切だが，経済状況の底上げも図らねばなるまい。そのためには、NGO や中心人物が貧困層の事情により意識を向ける必要があろう。

フィールドスクールから得られた知見について

ナショナルパーク内の土地利用の変遷，地域住民の生業への影響など，多様な視点からナショナルパークの意味・課題を考えることができた。ナショナルパークの恩恵を直接受けられない，大多数の人々の生活をいかに守るかについて，現地 NGO の活動から学ぶことができた。ASAFAS の教授による講義では，人と自然の複雑な関わり合いの中で，何を，いかに「持続（sustainability）」させるのか，何をもって「持続的」とみなすのか，といった指摘があった。１つの村の，短い時間軸に収まっていた自身の研究活動を思うと，その先に考えるべきことの大きさに圧倒された。

現地の学校にて高校生とディスカッション

また，私は途上国の貧困と教育格差の問題に関心があったため，NGO（SAGUN）のスタッフや地元の学生から，ネパールの教育の現状を聞くことができて有難かった。書籍の収集・貸出，農業の技術的支援や市場開拓など，SAGUN が農村の子供たちのために行ってきた多面的な支援活動と，その経緯を学んだ。高校・大学生との交流は，授業カリキュラムや家庭内の労働などに関して，双方向に理解を深める有意義な時間となった。また，他の参加学生からは，ストリートチルドレンが生きる社会について，そこで培われた秩序や価値観が，大人の想像以上に子供たちにとっては重要かもしれず，それがしばしば，援助団体による教育支援やその後の社会復帰を困難にすることなど，多くを学ばせていただいた。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

最終日の講義が印象的だった。私は，「伝統的な」社会構造や価値観，技術に対して，どこか不変的というイメージをもっていた。しかし，「伝統」と呼ばれるものも，長いスパンで歴史をみるならば，ごく最近作られたようだ。そこに，外部者が「伝統」と「近代」それぞれの利点を融合し，地域社会が良い方向に向かうように働きかける余地がある。

女性グループのメンバーが続々と集まり、
部屋はたちまち満杯に…

例えば，村の女性グループの活動は目を見張るものがあったが，最初は夫の理解が得られず，苦労もしたと聞く。しかし，積極的に公共事業に関わり，家の外へ出向くことによって，新たな役割を認められるようになったと実感していた。ネパールの農村においても，貯水池の水の利用や，開発プロジェクトの受益状況に，村内格差が散見された。こうした問題は世界各地で指摘されるが，プロジェクトの受益者をいかに拡大するか，有限資源をいかに平等に分配するかという視点が，建設的な議論にとって重要だと思う。